

# 農耕モンゴル人の文化の「再構築」に関する研究

—内モンゴル農耕地域における婚姻儀礼を事例として—

韓 艶麗\*  
Han Yanli  
袁 麗暉\*\*  
Yuan Lihui

## 論文要旨

近年中国のハイスピードな経済発展により、都市化が進み、農耕地域の人々が大量に都市部へ移動した。それに伴い、著しい地方文化の変化がもたらされた。本稿では、主に、内モンゴル通遼市ホルチン中旗のA村における、1990年代と現代との婚姻習俗の比較を通し、現代における各種のサービス業の発展により、モンゴル人が結婚披露宴を実施する際には、自民族が持つ固有の伝統文化を結婚披露宴に取り入れる現象が見られるようになったこと、そしてモンゴル人が都市部で創り出した「異種混合」の文化が内モンゴルの多くの地域に流行するようになったことを明らかにしている。それは、現代の農耕モンゴル人が、地方から都市部へ移動することによって、民族のアイディティを持つようになったという意識的な「文化の再構築」の活動である。本稿では主に、農耕モンゴル人の文化の再構築の過程を考察し、現代内モンゴルにおける文化の状況について論じていきたい。

## キーワード

再構築 農耕地域 モンゴル民族 婚姻儀礼

## I はじめに

内モンゴル自治区は49民族があり、同自治区の総人口は2481万7100人である(2012年統計)。その中で、漢民族の人口は1927万3558人(78.16%)で、モンゴル民族の人口は447万2026人(18.14%)である。この数字からも分かるように、内モンゴルは民

族自治地域とは言え、漢民族が約80%を占めており、モンゴル族は約20%を占めるのみである。更に言うと、中国国内の少数民族のうち、モンゴル民族の人口は約480万人であり、そして、その約93%が内モンゴル自治区に住んでいる。内モンゴル自治区のモンゴル人の3分の2は東部地域の通遼市、赤峰市、興安盟に集中して生活している<sup>1)</sup>(地図を参照)。つまり、モンゴル人の3分の2が農耕地域に住んでいると言える。本来、モンゴル民族の伝統文化と言えば、草原、モンゴルゲル、モンゴル民族服、牛や羊などが連想されるに違いない。しかしながら、現在、遊牧生活を送るモンゴル人はますます減少しつつあり、多くのモンゴル民族の伝統文化の様子は、例えば、置物の装飾品の中だけにしか見られない。前述したように、内モンゴル自治区内で3分の2を占めるモンゴル人の中には、農耕あるいは半農半牧の生活を送る人も比較的多く、農耕漢民族の生活と大きな違いが見られない。そこで外部の人たちからはよく「漢化したモンゴル人」と言われたりする。

実は内モンゴルのモンゴル人の間によく西モンゴル人・牧畜モンゴル人、東モンゴル・農耕モンゴル人という話がある。西モンゴル人・牧畜モンゴル人は、「われわれはチングスハーンの末裔で、

\*中国長江大学外国語学院日本語学科

\*\*山口大学経済学部観光政策学科

1) ボルジギン・ブレンサイン氏によれば、内モンゴルの338万人の三分の二が東モンゴル地域の通遼市、赤峰市、ヒンガン盟に暮らしている。

牧畜生活を営んでモンゴルゲルに住み、羊肉を食べ、ミルクティを飲み、標準モンゴル語<sup>2)</sup>を使っている『本物のモンゴル人』であり、東モンゴル・農耕モンゴル人は完全に「漢化しているモンゴル人だ」と言う。それに対し、東モンゴル・農耕モンゴル人は、「われわれは、チンギスハーンの弟であるハプトハサルの末裔なので、ホルチン文化を持ち、モンゴル民族に偉大な貢献してきた」というプライドを持つとともに、一部ではあるが、標準モンゴル語を一生懸命勉強し、モンゴル服を着て、羊肉を食べ、「本物のモンゴル人」になろうと行動する人たちが現れている。

以上のように、牧畜地域に生まれ育ち、標準モンゴル語を使う人たちは、「伝統文化」を継承している「正統」なモンゴル人であり、それに対し、農耕地域に生まれた東地域のモンゴル人は、「伝統文化」を喪失し「漢化」したモンゴル人という見方が存在している。東地域のモンゴル人は、自らのアイデンティティに曖昧さを感じており、一部の「知識人」たちは、「伝統文化」を求めて、「伝統文化」の特徴を示すモンゴルゲル、羊肉、モンゴル服などに注目する。そして、「本物のモンゴル人」のイメージを強調し、「伝統文化」を主張し、「異種混合」による「文化の再構築」に向けた活動をしている。モンゴル人としての自信やアイデンティティを取り戻す動きがあらゆるところに見られているのである。

それでは、現代の農耕モンゴル人は、どのようにしてモンゴル民族の文化を「再構築」しているのだろうか、そして、どのような過程を経て、モンゴル民族の文化を「再構築」しているのだろうか。本稿では、農耕モンゴル民族の婚姻儀礼を例にして、現代モンゴル人の「文化の再構築」の過程を明らかにし、現代モンゴル人の文化の状況に

ついて論じていきたい。

## II 先行研究

近年、モンゴルに関しては、モンゴルの歴史、牧畜民に関する研究が進んでいるが、農耕モンゴル人に関する研究が非常に少ない。また、農耕モンゴル人に関する研究においても、牧畜民からの変化、あるいは「伝統文化」の変化といった視点に立った研究しか見られない。

1980年代以降、ホブズボウム (E. Hobsbawm) は、特に近代化の過程における民族と国家とのかわり、労働組合の形成や展開などのテーマを伝統という語を用いて取り上げている。ホブズボウムは「伝統とは長い年月を経たものと思われ、そう言われているものであるが、その実、往々にしてごく最近成立したり、また時には捏造されたりしたものもある」(ホブズボウム1992:9)と指摘し、そして更に、「『創り出された伝統』は、実際に創り出され、構築され、形式的に制度化された『伝統』であり、更に容易にたどることが出来ないが、日付を特定できるほど短時間—おそらく数年間—に生まれ、急速に確立された『伝統』であるとし、「創り出された伝統」については、「通常顕在と潜在とを問わず容認された規則によって統括される一連の慣習であり、反復によってある特定の行為の価値や規範を教え込もうとし、必然的に過去からの連続性を暗示する一連の儀礼的なし象徴的特質。事実、伝統というものは常に歴史的につじつまのあう過去と連続性を築こうとする」(ホブズボウム1992:10)と捉えている。そして、「創り出された伝統」の特殊性を、「新しい状況に直面した際、古い状況に言及する形をとるか、あるいは半ば義務的な反復によって過去を築きあげるかといった対応のことなのである。それ

2) モンゴル語の教科書、モンゴル語の発音は西地域のシリングル地域の言葉を標準語にしている。

は近代世界の恒常的な変化および革新と、社会生活の少なくともある部分を永久不変のものとして構造化しようとする試みの対象性なのである」と定義している（ホブズボウム1992：10）。

そして、ホブズボウムの「伝統」に関する議論を引き継ぎ、「伝統文化」を多方向からの視点に立って検討する研究が現れるようになった。特に、現地人による「伝統」についての語りに関する研究は注目に値する。渥美氏は、伝統文化は常に変化している（渥美一弥1996：105-125）が、伝統文化を語る主体は変化していないと指摘し、その実態を解明している。柄木田氏は伝統文化を一枚の板で捉えるのではなく、多方面で捉え、調査地の人々の実態を取り上げて議論するべきであると指摘した（柄木田康之1997：87-99）。則竹氏は、伝統文化を取り扱う際に、現地人のエリートの言説ではなく、エリートとは位置付けられない人々の言説や実践に注目し、伝統文化の新しい概念を提示した（則竹賢2003：87-105）。福井氏は、現地人は、民族史、歴史を「伝統文化」を図るメルクマールとしている（福井2005：47）と述べた。

ホブズボウムの事例では、スコットランドにおける伝統の象徴となっている民族衣装のタータンチェックキルトやバグパイプなどは、それまで、野蛮の印として否定的なイメージしか持たれなかったが、スコットランドが他者としてのイングランド、アイルランドに対抗し、自らの象徴を持つ必要性から、近代において、意図的に「創造」された「伝統」であると言う。筆者は、本稿で取り上げる事例において、農耕地域に生活していたモンゴル人は、都市部へ移動することによって自民族の文化を再認識し、民族文化のアイデンティティを持つようになったこと、そして、意図的に、意識的に、文化を「再構築」し、それが、内モンゴル全体に流行するようになったことを述

べていきたい。ホブズボウムの事例には、伝統文化の意図的な再創造について書かれているが、現代社会の通信技術の発展・発達を背景として、モンゴル人の「創り出された文化」が、更に内モンゴル全体のモンゴル人に波及した状況、つまりは、地方の文化が都市部の舞台に持ち込まれ、更に、その「創り出された文化」が地方へ広がっていく現象については、これまでの研究の事例では触れられることがなかった。本稿の事例は、ホブズボウムの研究の補充的な内容になり、実際に現地に生活している現代モンゴル人のリアル性や現地人に実践された地域文化について理解できるものとする。

### Ⅲ 調査地域概要

内モンゴル自治区は中国北部に位置し、118.3万平方キロメートルの面積で、新疆ウイグル族自治区、チベット自治区に次ぐ面積を誇る。筆者の研究対象地は、通遼市ホルチン左翼中旗A村（地図参照）である。当該地域のモンゴル民族の人々は、農業と牧業を並行して行う半農半牧の生活様式が基本である。計167世帯、人口は687人、モンゴル民族の人口は約98%で、主な日常交流言語はモンゴル語である。耕地面積は35000ムーで、主にトウモロコシ、緑豆、アワなどを生産する。1人当たりの収入は約5000元である。2000年の人口は約1200人、2016年は約1080人、2018年の人口は約687人（2018年7月の現地調査データ）。このことから分かるように、農村人口は大幅に減少している。その主な要因は、都市部への出稼ぎや進学による人口移動である。



地図1. 内モンゴルの位置と内モンゴルの盟・市の位置<sup>3)</sup>

#### IV 農耕モンゴル人の婚姻儀礼の過程

以下では、筆者は2018年7月から9月まで、通遼市A村において実施した現地調査の事例を並べて考察していきたい。

##### (1) 1990年代における農耕モンゴル人の結婚披露宴の状況

###### 事例1

夫の王烏力吉(オウ ウルジ)は23歳で結婚し、現在42歳である。通遼市ホルチン左翼中旗A村の農牧民である。妻の張春梅(チョウ シュンメイ)は26歳で結婚し、現在45歳である。結婚する前は、通遼市ホルチン左翼中旗ホダング蘇木(会田召)のアバガイル(A村から30km離れている所)で生活していた。知り合ってから結婚までの過程について夫は、「私たちは仲人によって知り合った。アバガイルに私の親戚がいたので、紹介してくれた。結婚を決めた後、アリヒアゴラガホ式(婚約式)は実施せずに、知り合って半年たたないうちに結婚した。婚資としては、現

金4000元を渡し、4種類の衣類、自転車を用意した。結婚披露宴は、占い師だった母が、1995年12月18日を吉日として選定した。結婚披露宴も華やかには実施しなかった。当時、経済的に貧しかったので、通遼市に3日間旅行に行き、戻ってきて、親戚たちと小規模な宴会を実施し、結婚披露宴を済ませた」と話してくれた。

###### 事例2

夫の華銀龍(カ インロウ)は23歳で結婚し、現在37歳である。通遼市のスーパーで働いている。新婦の韓紅霞(カンコウカ)は23歳で結婚し、現在37歳である。通遼市で、個人の床屋を営んでいる。2人はもともと通遼市ホルチン左翼中旗A村の人である。2010年から通遼市に出稼ぎに行った。知り合ってから結婚までの過程についての妻の話は、「小学生、中学生時代の友達であり、2人とも高等学校に行かずに、田舎で親の農業を手伝っていた。23歳という結婚するのに適切な年

3) 盟・市の表記は、モンゴル語での発音の地名をひらがなで表記し、中国語での発音の地名を漢字で表記した。これらの地名は、ボルジギン・ブレンサイン氏の2003『近現代におけるモンゴル民族農耕村落社会の形成』風間書房と温都日娜2007『多民族混住地域における民族意識の再創造—モンゴル族と漢族の続載婚姻に関する社会学的研究—』溪水社を参考した。

齢になると、華銀龍は以前から私のことがずっと好きだったということで、親に頼んで仲人を私の家に行かせるようにし、結婚の決定後、1999年7月にアリヒアゴラガホ式（婚約式）を行った。ベレゲ（結納金）は現金8000元、4種類の衣類、金のアクセサリー、指輪等をもらった。結婚披露宴は2000年の12月20日に行った。日にちについては占い師に吉日を決めてもらった」というものであった。

また、これら2人のインフォーマントに、当時の物価、年収、結婚披露宴における参加者からの贈り物、婚姻習俗の流れについて聞いたところ、その結果は、次のような内容であった。

#### ・当時の物価及び年収

トウモロコシ500gは3角<sup>4)</sup>から5角、卵1個2角。事例1の家族の年収は8000元ほど、事例2の家族の年収は1万5000元ほどであった。

#### ・結婚披露宴に参加した客からの贈り物

現金と現物であった。現金については、親戚の人は50元で、一般の人は20元だった。事例2の妻の話によると、「叔母からは炊飯器をもらった」とのことだった。

#### ・当時の婚姻習俗の基本的な流れ

結婚が決定した後、新婦側の婚約者は、新郎側の親戚が農業をする際に履く手作り靴を10足から20足ほど準備する。結婚披露宴の日が近づくと、新婦側の結婚披露宴の準備が始まる。まず、介添人、コック、主宰者を探す。結婚披露宴2日前に、コックと主宰者、親戚の男性は、披露宴に出す料理を計画する。そして、結婚披露宴前日になると、親戚の女性と友人が野菜を洗ったりする。また、親戚の若い男性は、村の親戚や友人の家に行き、披露宴に使ういろいろな種類の茶碗を集

める（披露宴後に返却）。新郎側では、新夫婦のために、新しい敷き布団と掛け布団を2枚ずつ準備する。それらを準備する際、親戚、仲の良い友人が手伝いに行く。そして、介添人、コック、主宰者を探すことを始めとして、結婚披露宴の準備は、新婦側と同じように進める。添い嫁は、新婦と同じ年齢か年下で、結婚していない女性であれば、誰でも担当できる。一般的には、新婦の友人あるいは妹が担当し、結婚式当日に新婦の世話をする。添い婿も添い嫁の場合と同様の人を選ぶ。役割は、新婦側の披露宴に新郎と一緒にいき、新郎の補助役となることである。例えば、新郎が、新婦側の親戚にたばこを勧めたり、それに火をつけてやったりすることに対して、細かな手伝いをするのである。そして、花嫁と介添人は、新婦側の披露宴の夜になると、歌を歌ったり、踊ったりして、若い人たちからかわれたりする。また、当時は、村に何人かの有名なホゴールチン（四胡を弾く人）がいて、10人ほどの人が集まって、ホゴールに合わせながら民族歌を歌ったり、女性たちが踊ったりする姿も見られたようである。事例2においては、「当時、とても賑やかであった。次の日になると、新婦を新郎側に送るのだが、当時はトラクターで送った。四輪車に新郎、介添人が新婦を囲んで座り、親戚、友人など、合わせて20人ほどで送った。」という妻の話がある。

以上の事例からは、農耕地域の村落では90年代前後、男女が仲人による縁談で結ばれたり、近隣の村に住んでいることで知り合ったりしていること、そして、婚約した後は、村内で婚約式を行っていたことが窺える。婚約式では、新郎側が新婦側に、結納品や金のアクセサリーなどを渡し、その後、新婦側は新郎側の家族に手作り靴を10足から20足くらい作って用意する。結婚披露

4) 人民幣の単位である。2020年8月4日の為替で計算すれば、1元=15.1949円。1元=10角

宴も、村長や親戚の助けを借りて、自宅で実施する。特に興味深いのは、テーブルで使う食器、皿、椅子など、結婚披露宴で必要とされる物を村の親戚や隣人から借りることである。つまり、結婚披露宴の全過程は、村人の助けによって実現されるのである。外部者の介入なしに、1つの村の範囲内で行われるのが通常の姿であった。また、結婚披露宴では民族歌が歌われたり、民族舞踊が踊られたり、二胡が演奏されたりすることがよく行われていた。しかし、結婚披露宴でモンゴル民族の服を着ている人は見られず、馬頭琴を弾いている人もおらず、チーズなど、モンゴル民族の特色ある食品も、料理に提供されることはなかった。

次に、現代モンゴル人の結婚披露宴について、以下の事例で見ていきたい。

## (2) 現代農耕モンゴル人の結婚披露宴の状況事例

2015年、筆者は再びA村の結婚式場で新郎の白氏と新婦の張氏にインタビューした。白氏の実家はA村、張氏の実家はB村で、A村とB村は約60キロメートル離れている。勤務地は、内モンゴルの首都フフホト市。同年1月に張氏の実家であるB村で結婚披露宴を行い、その後、白氏の実家であるA村で結婚披露宴を行った。同年6月に2人の勤務先のフフホト市において、再び結婚披露宴を行った。

張氏の話によると、張氏と白氏は高校の同級生で、一緒に内モンゴル師範大学に進学し、大学卒業後に交際を始めた。その後、結婚を決め、お互いの実家を訪ねて、双方の両親に会って結婚の話をした。張氏は、夫側からの結納品など、何も要求しなかった。白氏が語ってくれた、同年1月8日に行われた新郎側の実家における結婚披露宴の過程を、以下に紹介する。

1月8日午前4時30分、白氏と花婿の添い婿は、実家があるB村を出発した。明け方の5時30分頃（占い師が占った縁起の良い時間帯）、花嫁の実家があるA村に到着した。到着すると、何人かの人ドアの外に立って、彼らを部屋に入れないようにした。彼らはいろいろな質問を受け、それに答えながら「紅包」（現金を入れた赤い封筒）を渡した。そうして初めて、花嫁がいる部屋のドアを開けて入室し、花嫁を迎えることができる。花嫁の部屋に入ると、花嫁の両親や親戚たち1人ずつのたばこに火をつけながら、ハダック（白い細長い布でモンゴル民族が重要な儀礼に尊敬する年配の人や客にあげるものである）を手渡した。それから、花嫁の方の2人のベルゲン（新婦新郎の兄の嫁）が新郎をモンゴル民族服に着替えさせた。服を着替えた後、2人のベルゲンに「紅包」を渡した。その後、村のホテルで結婚披露宴を挙げた。張氏によると「ホテルと専門業者に依頼したので、すべては彼らの手配で行い、流れと順序は司会者が決めた。」とのことであった。

張氏は、現在、農村地域でも結婚披露宴を行う際には、1990年代のように、結婚披露宴に使う道具や食器などを借りる必要がなくなったと話してくれた。それは、今では、結婚披露宴を取り扱う専門業者が全部用意するようになっているからで、内モンゴルの首都であるフフホト市には、モンゴル人向けの民族風のレストランがたくさんあるということである。例えば、フフホト市では「モンゴル大營」というレストランが有名である。このレストランでは、いつもモンゴル風の結婚披露宴を行っている。当然、2人の結婚披露宴は、そのレストランで行われたのである。以下にフフホト市における結婚披露宴の様子を紹介する。

結婚披露宴の当日、式場にはチングスハーン像（写真1）を置かれ、舞台にはモンゴルゲル（写

真2)が飾られ、その前のテーブルには、スルデ(剣)、長命灯、乳製品、銀の茶碗、弓(写真3)などのモンゴル民族の伝統的な装飾品などが置かれていた。レストランの入り口には、馬頭琴を弾く演奏者もいる。時間になると、司会者が舞台の中央に立って司会を始めた。新婦は舞台のモンゴルバッグの中に座り、新郎は弓矢を持って新婦を迎えに行く。しかし、モンゴルゲルの前には4人の若者が立っていて、新郎を入れないようにする。そして、新郎に対するいろいろな邪魔立てをするが、新郎が「紅包」を渡すと、新郎はよう

やくモンゴルゲルに入ることができ、新婦との面会が叶う。それから、司会者は、新郎新婦、添い婿、添い嫁を紹介する。その後、新郎新婦はチンギスハーンにお辞儀をする。その際、司会者は、ユルゲルウゲ(お祝いの言葉)を述べる。次に、司会者の話に沿って、新郎新婦は来客にお辞儀をする。その後、新郎新婦は、両親にお辞儀をし、両親からユルゲルウゲをもらう。

上述したすべての式が終了すると、司会者の話に沿いながら、来客の地位や年齢に考慮しつつ、酒を注いで回る。この間、舞台では、馬頭琴の演



写真1 チンギスハーンの像



写真2 結婚披露宴に使うモンゴルゲル



写真3 結婚披露宴の舞台上で使われるモンゴル風の飾り



写真4 白氏夫婦、沿い婿、添い嫁



写真5 新婦の杭氏と新郎の芩氏



写真6 新婦を乗せている車のグループ

奏や歌、踊りの余興が始まる。また、モンゴル語（東部地域）を使っただけのお笑い芸人も登場する。

以上のように、白氏夫婦は内モンゴル「農村地域」出身で、大学卒業後、フフホト市で就職した。2人は実家のある農村地域で結婚披露宴を行い、勤務先のフフホト市で再び披露宴を行った。筆者が、「モンゴル服を着て、華やかな結婚披露宴だった」と語りかけると、張氏は、「フフホト市で行われるモンゴル人の結婚披露宴は、モンゴル風で実施されることが多い。例えば、モンゴル服を着たり、モンゴルゲルを建てたりしている。私の披露宴の司会者は、フフホト市でも有名な司会者である。私の友達は歌手として活躍しているので、その友達の紹介で、この有名な司会者に依頼することができた」と答えてくれた。白氏の結婚披露宴のように、フフホト市、更には通遼市といった都市部で、モンゴル人は「モンゴル風」の結婚披露宴を行っている。

### (3) 1990年代と現代における農耕モンゴル人の結婚披露宴の比較

2000年代以前は、異性同士が知り合う範囲は、村内、あるいは近隣の村までであり、仲人を通して知り合うことによって婚約が成立し、地元で結婚披露宴を行って、地元で生活していくことが多かった。しかし、現代は、男女は様々な地域において、様々な方法で知り合う。そして、婚約の成立後、結婚披露宴は従来通り、新婦側、新郎側の2回行い、それに加えて、新郎新婦の勤務地域においても行うことが多くなった。特に、モンゴル語教育を受けた大学卒業者は、都市部において、モンゴル民族の衣装を着用し、モンゴル文字を使用するような結婚披露宴を行っている。

また2000年代以前、結婚披露宴は自宅で行われ、披露宴に使う道具等はすべて村の人々から借

りるなど、村人の手伝いによって、それを行うことが可能になっていた。しかし現在は、結婚披露宴の準備や運営は専門業者に依頼するようになっており、結婚披露宴を担う村人の役割や労力の提供は大きく減少したと言える。経済発展に伴い、数多くのブライダル業者が生まれ、多様なサービスが提供されるようになっている。

婚資についても変化が見られる。例えば、2000年代以前の婚資は、現金、金のアクセサリー、指輪等が主であったが、現在では、マンションや乗用車など、生活に必要とされるものによって変わってきている。また、前述したように、婚姻関係者のかつての移動手段は、トラクターやマイクロバスであったが、今では乗用車になっている。このような変化は、やはり経済発展や都市化の進展に伴うものであると考えられる。

以上のように、地方に住む若年層の減少、婚姻習俗の簡略化、ブライダル業者の増加と多様化が見られる中で、特に、大卒者が、その勤務地で結婚披露宴を行う際には、民族衣装が着用されたり、民族食品が提供されたり、また、馬頭琴が演奏されたり、モンゴル文字が使用されたりする。つまり、モンゴル民族の特徴的な要素を取り入れた結婚披露宴の流行が見られているのである。こうした婚姻習俗の変化の要因は、国家の経済発展に伴って、婚姻を専門に取り扱う業者が数多く現れ、様々なタイプのサービスを提供できるようになったことにあると思われる。そしてまた、「モンゴル風」の結婚披露宴の流行は、国家による民族政策や、インターネットの発達などによる情報化社会の進展とも関係があると思われる。

それでは、ブライダル業者は、どのような経過をたどり、モンゴル民族固有の「伝統文化」を結婚披露宴に取り入れているようになったのだろうか。そしてそれを、都市部から地方へどのように

広めてきたのだろうか。以下では、都市部において「モンゴル風」の結婚披露宴を行うブライダル業者の事例を見ていきたい。

## V 都市部並びに地方における結婚披露宴の実施状況

筆者は、2015年9月から11月まで、フフホト市、通遼市において、結婚披露宴を業務内容とするブライダル業者に対するインタビュー調査を実施した。フフホト市では、市で最も著名な司会者である王氏に対してインタビューを行った。通遼市には、3つのブライダル業者があり、10数人のモンゴル人の司会者がいると言う。筆者は、5人の司会者たちと一緒に食事をしながら、近年のモンゴル族の結婚披露宴のことを話題にしてみた。彼らの話では、通遼市では、2012、13年頃から、モンゴル人の結婚披露宴が「モンゴル風」で行われることが流行し出したとのことであった。

### 都市部における事例

王氏は53歳で、内モンゴル通遼市のクーロン旗生まれである。内モンゴル財經大学を卒業し、現在、内モンゴルのフフホト市内で、モンゴル民政局婚姻登記所の職員として働いている。仕事の合間に、新婚夫婦の披露宴の司会をすることが多い。王氏の話によると、90年代には、モンゴル人の結婚披露宴に、モンゴル族の様々な習慣は導入されていなかった。当時、王氏は、友人の結婚披露宴の司会をする際に、初めてモンゴル語による司会のスタイルを取り入れ、モンゴル族の特色を出そうとした。このスタイルによって、徐々に知名度が高まり、結婚披露宴の司会が徐々に収入の多いビジネスとなっていった。しかし、人々の生活状況と認識度が高まるにつれ、こうした司会の方法も単純であり、時代遅れであると考え

ようになり、結婚披露宴にモンゴル族の文化をより多く導入することにした。そのため、彼は、モンゴル族の歴史や習慣、更にはチンギスハーンのことわざなども研究した。また、モンゴル族に関するテレビ番組を意図的に視聴したり、モンゴル族の文化雑誌『モンゴル文化通史』を参照したりした。特に高齢者へのインタビュー記事には意識的に目を通すようにした。そして、自身の経験と結び付けて、モンゴル族の文化の中で最も特色のある17種類の習慣・習俗を結婚披露宴に導入すべきだと考えた。こうして、モンゴル族特有の結婚披露宴を改めて企画し直すことにした。彼は余暇を利用して、様々な結婚披露宴の研究に没頭した。また、結婚披露宴の司会だけではなく、種々の祝賀会など、様々な形の会も企画した。そして、副業ではあったが、この業界の主宰として業界を発展させたのである。

王氏は、結婚披露宴の舞台に、①チンギス・ハーンの像(写真1を参照)②蘇力徳(モンゴル族の白と黒の剣。白は平安祈願、黒は厄除け祈願の意味である。モンゴル人は、結婚式の際に不吉なものが現れると考え、黒い蘇力徳を並べることで不吉なものを排除しようとするのである。写真3を参照)③モンゴル族の乳製品(写真2のテーブルに置かれている物)④モンゴル族の鍋(写真4の飾り物)を置く。

王氏が結婚披露宴の司会の過程に取り入れたモンゴル族の要素についてであるが、昔のモンゴル族の風習では、新郎が弓を引いたり、羊の首や足の骨をひねったりして、男性の力を試すことが行われていた。しかし、王氏が企画した結婚披露宴では、弓を引いて男性の力を試す儀式のみが導入された。その理由は、レストランの舞台で新郎が羊の首や足の骨をひねる儀式を行うことは不可能であるからである。また、弓を引くことにつ

いても、そのふりをさせるだけであって、そのようにして新郎の力を表現させたのである。また、昔は、新郎が草原で馬に乗って新婦を出迎えていたが、披露宴で馬に乗るのは無理であるので、新郎が馬鞭を持つことで、乗馬している行動を意味するように変えた。王氏はまた、結婚式の舞台上、新郎新婦が母親へ「生乳」を捧げて感謝する儀式も導入した。その儀式は、母親が子供に授乳する時期が子育てで最も重要であり、母乳を与えてもらったことを有り難く思わなければならないとするモンゴル人の考えに由来する。実際の結婚披露宴では、新郎新婦が母親にプレゼントを用意し、プレゼントにハダックをかぶせ、ハダックの上に牛乳を置いて母親に捧げ、新郎新婦の母親への感謝を表すようにしていた。

王氏によるモンゴル風の結婚披露宴の演出を取材して、その司会の流れの中に、モンゴル民族の特色ある文化の要素が意識的に取り入れられていることを理解することができた。新郎が馬に乗る代わりに馬鞭を持って新婦を迎えたり、新郎新婦が母親に生乳を捧げて、育ててもらったことに対する母親への思いを表したりする。このようなことから、王氏が、民間に伝わる固有の文化を積極的に演出に取り入れ、それを意識的に広めようとしていることが窺われた。そして、王氏は今、内モンゴルで高い知名度を持ったモンゴル人司会者である。王氏の影響により、多くのモンゴル人の若者が、王氏に結婚披露宴の司会の知識を学びに来る。例えば、通遼市の「モンゴル礼儀文化メディア会社」のオーナーであるバヤル氏は、王氏から学んだ1人であり、一定の経験を積んだ後、通遼市で初めて「モンゴル風」の結婚披露宴を行うプライダル会社を設立した。その後、内モンゴルの多くの地方に「モンゴル風」を謳った同様の会社が数多く現れるようになった。

司会者たちは、インターネットを通じて情報を交換することもあれば、年配の司会者や牧畜地域の司会者から直接学ぶこともある。筆者が、王氏が司会をしていた結婚披露宴の調査に行った際、王氏には2人の弟子がいた。王氏は「彼らは将来、結婚披露宴などの司会者になることを希望しているため、私の司会の方法を勉強しているところである。彼らのように、私から司会の知識や方法を学んで、プライダル会社を立ち上げた人も多い。興安盟の1人の学生は、私のところで結婚に関する儀礼や作法の知識を2年間学んで、現在、興安盟ウランホトで婚姻関係の会社を設立している。別の学生も、通遼市で同様の会社を設立している。」と語ってくれた。年配の司会者が弟子を育て、弟子たちが故郷に戻って、結婚披露宴を始めとする様々な会の司会をしている。このようにして内モンゴル全域に、「モンゴル風」の結婚披露宴が広がりを見せているのである。

以上のように、現在、モンゴル人の若い司会者たちは、内モンゴルの首都であるフフホト市に行ったり、インターネットを利用したりして、結婚披露宴の司会の方法を学び、モンゴル風の結婚披露宴を行う会社を自分の故郷で設立し、都市部で創り出された文化を都市部から地方に波及させているのである。更に以下では、地方のプライダル業者の事例を見ていきたい。

#### 地方における事例

満達胡は36歳。通遼市中旗の出身で、2001年に内モンゴル民族師範学苑（フフホト市）を卒業した。卒業後、フフホト市やエレンホト市で貿易関係の仕事に携わり、2011年に、シェブルト鎮の中心小学校に音楽の教師として就職した。2012年、シェブルト鎮の友人と音楽系のグループを作り、たくさんの会に参加するうちに、彼は司会者とし

で活躍するようになっていた。

満氏は、結婚披露宴の司会の状況や順序について、「私が司会する時は、ほぼ標準モンゴル語で話す。でも、客の要求によっては中国語で司会する場合もある。私は、地方で司会をする場合には、その土地にあるレストランで、舞台の装飾はせずに司会を行う。結婚披露宴は、①新郎新婦が舞台上がる②新郎新婦を紹介する③新婦新郎の両親が舞台上がる④新郎新婦が両親にお辞儀をして改口（新郎新婦が初めてお互いの両親を父母と呼ぶ）儀式を行う⑤新郎新婦がお互いに誓いを立てる⑥新郎新婦が指輪を交換する⑦新郎新婦がワインを飲み交わす⑧新郎新婦がお互いに感謝の言葉を述べ合う⑨新郎新婦が舞台から降りて着替えをしに行く⑩馬頭琴手が馬頭琴を弾き、歌手が歌い始める、という順序で行われる。私たちの地域での結婚披露宴は、ほとんどこのような流れで進められる。漢民族とモンゴル民族の結婚披露宴の順序には、ほぼ違いがないが、現在、モンゴルの村では、結婚披露宴の際、新婚夫婦はモンゴル民族の服を着用することが多くなっている。そして馬頭琴手、ホゴールチン（胡を弾く人）を呼ぶことも多くなっている。」と話してくれた。

また、満氏は、都市部でモンゴル風の結婚披露宴を司会する場合について、「①新婦はモンゴルにいる②新郎が舞台上がり、新婦をゲルに迎えに行く③司会者はイルゲルウゲ（祝いの言葉）を述べる④新郎新婦が舞台の真ん中に立つ⑤新郎新婦が空にお辞儀をする⑥新郎新婦がチンギスハーンにお辞儀をする⑦新郎新婦が両親にお辞儀をし、ハダックを持ちながら酒を捧げる⑧民族歌を歌う⑨民族踊りをする、という流れで行う。」と述べている。

そして、満氏は、「私は司会を専門的に勉強していなかった。ネットでモンゴル風の結婚披露宴

の司会の順序や方法を学んだ。また、ネットにより、通遼市の有名な司会者たちのビデオを見て勉強した。更に、モンゴル民族の伝統に関する本を参考にして、イルゲルウゲ（祝いの言葉）や伝統的な民族習慣について理解した。そして、それらに自分なりの創意・工夫を加えて、結婚披露宴の演出に生かすようにした。これまでは、モンゴル風の司会と言っても、漢人の司会をそのままモンゴル風に焼き直しているようなところがあった。例えば、漢人がスーツやウィディングドレスを着ていたなら、モンゴル人は民族服を着て、司会の言葉も、漢人の言葉をそのままモンゴル語に直しているだけであった。」とも述べている。

更に、満氏は、「農村地域では、結婚披露宴だけは、便利さを考慮して専門業者に依頼しているが、結婚披露宴に至る各段階での儀式等については、ほぼ変わっていない。例えば、ハダックタビホ式（婚約式）、その後のシグソフルゲホ式（新郎側が新婦に肉類を送る式）など、重要な儀式はまだ行われている。都市部では、このような儀式は通常行わないので、結婚披露宴の演出には取り入れるようにしている。」ということも語ってくれた。

以上、都市部と地方におけるそれぞれの結婚披露宴の状況について示し、地方では、都市部で創



写真7 司会者による舞台の装飾

り出された「モンゴル風」の結婚披露宴を基にしながらも、地方に伝わる固有の文化を取り入れながら、新しい「モンゴル風」の結婚披露宴を作り出していることを明らかにした。地方は、フフホト市や通遼市のような大都市で作り出された結婚披露宴の演出の形を土台としながら、モンゴル民族に伝わる固有の文化的要素を選択、導入し、それらを構築し直す過程を経ているのである。

## VI おわりに

改革・開放政策以降、中国の民族政策は新たな展開に移った。「伝統」的な文物に対する負の評価が見直されていく中で、少数民族の「固有」文化や社会慣習の再評価の動きも現れるようになった(瀬川1999:87)。経済発展と現代化を国是として追及する国家全体の指向性の中で、多くは後発的な辺境地域に居住している少数民族の地方幹部たちが、観光開発というものを自分らの経済的発展のための重要な戦略の一つとして据えたことによる(瀬川1999:87)。このように、近年、内モンゴルにも、草原を利用した旅行開発、モンゴルゲルのレストラン、草原におけるモンゴルゲル宿泊などの旅行商品が現れてきた。すなわち、中国の多民族社会、漢民族中心社会の中で、モンゴル民族としてのアイデンティティーを持って、意識的に、操作的に自ら民族の文化を広めている行動である。

それでは、農耕モンゴル人はなぜ、フフホト市のような大都市に移動後、自民族の文化を見直し、自民族のアイデンティティーを持つようになったのだろうか。太田好信は「情報ネットワークの世界規模での展開、交通手段の飛躍的な向上と庶民化などをとおして、自らが生まれた社会の文化と永続的な関係を結ばずに生活できるオプションが選択可能になった。そのようなオプションの選

択が可能になったということは、裏を返せば、自己形成は個人の責任で行われなければならない、という激しい社会状況の発生を意味する。雑多な文化要素が入り乱れる社会においては、自己のアイデンティティの希求はさらに高まるだろう」[太田1993:400]と述べている。このようなことを背景として、近年、中国の多民族社会、特に漢民族が多数を占める社会に生活しているモンゴル民族が、「モンゴル風」の結婚披露宴を行い、広めることは、自民族の特徴、アイデンティティの探求における象徴的な行動の一つであると言える。そうした意味合いにおいて、モンゴル人の司会者たちは、自民族の文化を結婚披露宴に意図的、意識的、操作的に取り入れている。

筆者が、本稿で、90年代と現代の婚姻習俗を比較した結果、現代のモンゴル人が結婚披露宴を実施する際には、モンゴル族の「伝統的な文化」の要素を、結婚披露宴の演出に取り入れている行動が見て取れた。モンゴル族の司会者たちは、結婚披露宴の司会をする際に、舞台を「モンゴル風」に飾るなど、新たな「伝統文化」を創出する活動を行っている。フフホト市の司会者である王氏のインタビューを通して、結婚披露宴の司会をする際には、モンゴル民族の歴史に関する書籍の内容、テレビを始めとするメディアによる情報、ホルチン文化(主に農耕地域の地方文化を指す)への知識などを生かしながら、伝統的なモンゴル文化の様々な要素を取り入れつつ、結婚披露宴を作り出していることが分かった。それは、「文献などに示されている伝統文化」「モンゴル要素を取り入れた漢民族文化」「モンゴル要素を取り入れた西洋文化」「地方文化」といった異なる文化の内容を「異種混合」的な文化としてまとめて、新たな「伝統文化」を創出していることを指す。また、王氏の事例で示したように、都市部で「創ら

れた文化」が、弟子養成の所産として受け伝えられたり、また、ネット上で流布されたりすることによって、都市部から地方へ流通し、伝播していく状況がある。すなわち、地方の文化としてのモンゴル固有の文化が都市部の舞台に上がり、それが「異種混合」して、また地方へ流れていくという状況である。

満達胡氏は、事例において、「農村地域では、結婚披露宴だけは便利さを考慮して、専門業者に依頼しているが、結婚披露宴に至る各段階での儀式等については、ほぼ変わっていない。例えば、ハダックタビホ式（婚約式）、その後のシグソフルゲホ式（新郎側が新婦に肉類を送る式）など、重要な儀式はまだ行われている。都市部では、このような儀式は通常行わないので、結婚披露宴の演出には取り入れるようにしている。」と述べている。このように、地方では、伝統的な婚姻習俗に基づいて各種の儀式を実施しているが、結婚披露宴だけは、専門業者に依頼している。満氏は以前、「漢族風」「西洋風」で結婚披露宴の演出を行い、中国語で司会をしていたが、2015年以降、フフホト市において、モンゴル民族の特徴を示す演出を取り入れた。満氏は、「モンゴル風の司会をする前は、漢族風や西洋風中心であったが、現在はほとんど、モンゴル風で司会するようになっていく。モンゴル人はやはりモンゴル風の方が好きだ。モンゴル風の道具を購入してよかったと思う。今後はもっと充実していけると思う」と語る。このように、満氏は、ネットを始めとする様々な媒体を通じて、「モンゴル風」の司会や演出の方法を知り、フフホト市で、それらを生かした「モンゴル風」の結婚披露宴を行うようになった。また、フフホト市において、舞台の装飾品等も調達している。更に、こうした司会業を営む人たちは、ネットワークを通じて、大都市から小規

模の都市、更にはそれより人口の少ない鎮にまで影響を与えている。つまり、地方の地域文化の伝統的な要素が取捨選択されながら、都市部の文化に取り入れられて再構築され、また、その再構築された文化が、再び地方に波及するという現象が見られているのである。

## 参考文献

### 日本語

瀬川昌久

1999「中国南部におけるエスニック観光と「伝統文化」の再定義」『東北大学アジア研究センター』(3) : 85-111

則竹賢

2003「ヤップのやり方、昔のやり方、ヤップの格好：ミクロネシア・ヤップ社会における「伝統」概念の分析」『年報人間科学』87-105

太田好信

1993「文化の客体化—観光を通じた文化とアイデンティティの創造」『民族学研究』57(4) : 383-410

ボルジギン・ブレンサイン

2003a『近現代におけるモンゴル民族農村村落社会の形成』風間書房

2015b『内モンゴルを知るための60章』明石書店

福井栄二郎

2005「伝統文化の真正性と歴史認識—ヴァヌアツ・アネイチウム島におけるネテグと土地をめぐる—」『文化人類学』47-74

ホブズボウム (E. Hobsbawm) 著, 前川啓治, 梶原景昭

他訳

2002『創られた伝統』紀伊國屋書店

ポリジギン・セルゲレン

2002「満州国の東部内モンゴル統治」『本郷法政 紀要』11 : 73-114.

モンゴル研究所編

2007『近現代内モンゴル内モンゴル東部の変容』雄山閣

**中国語**

通遼市文化志編委会

2008『通遼市文化誌 (1992-2008)』通遼市文化局

内蒙古自治区統計局

2012『内蒙古統計年鑑』中国統計出版社

黄利霞

2006「传统的断裂与复兴巴彦浩特镇蒙古族婚礼仪式的变迁」『文化空间』76-77

李静宇, 阿荣高娃

2013「试论少数民族婚俗文化资源的旅游开发—以科尔沁婚礼为例」『产业经济』25-29

国家民委民族問題五丛书编辑委员会

1981『中国少数民族』人民出版社

王志清

2008「农区蒙古族村落的蒙古贞婚礼仪式变迁—以烟台营子村为个案」『民俗研究』46-52

张桂娜, 张丽萍

2013「内蒙古民族文化的视角传播策略—以鄂尔多斯婚礼为例」『前沿』7: 189-191

费孝通

2003『文化与文化自觉』群言出版社